

4 黄色粘着板によるヒメトビウンカの発生状況調査

(1) 目的

イネ縞葉枯ウイルス (RSV) の媒介虫であるヒメトビウンカの水稲への飛来動態及び水田周辺の発生動態把握のため、黄色粘着板を用いた調査の有効性を検証する。

(2) 方法

①調査場所

イネ縞葉枯病少発地域の県中部及び多発地域の県南部予察灯近隣の水田とした (県中部：宇都宮市瓦谷町 (農業試験場本場) の早植水田 1 か所、県南部：栃木市大塚町 (農業試験場原種農場栃木農場) の普通植水田 2 か所、小山市小薬 (予察調査ほ定点)：早植水田 1 か所)。また、粘着板設置周辺の主な作付麦種は二条大麦であった。

②調査方法

黄色粘着板 (ホリバー：長辺 26 cm×短辺 10 cm、アリスタライフサイエンス K.K.) を長辺が縦になるように支柱に固定した。設置高は粘着板中央部が田面より 1.5m となるようにし、畦畔際に約 3メートル間隔で 5 枚設置した。文字等の印刷面を南あるいは西向きとした。粘着板の回収間隔は概ね 1 週間ごととし、粘着板に付着したヒメトビウンカ成虫数を計数した。

③調査期間

宇都宮市瓦谷町：2014年5月27日～10月26日

栃木市大塚町：2014年5月27日～10月26日及び6月23日～10月23日

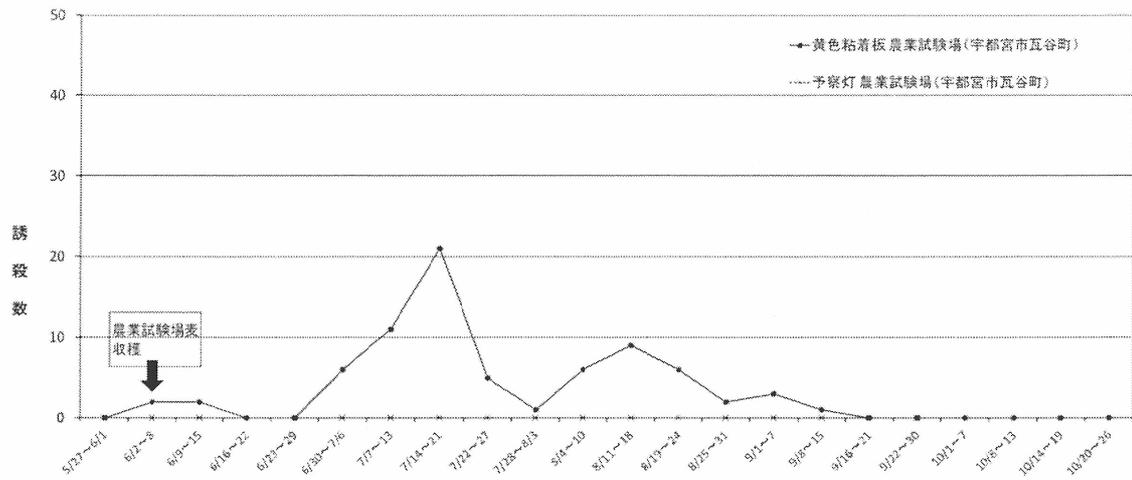
小山市小薬：2014年5月27日～8月3日

(3) 結果及び考察

①県中部の調査地点では、予察灯での誘殺は調査期間を通して認められなかった。一方、粘着板への誘殺は少なかったが、6月上中旬にわずかに誘殺が認められ、その後も7月第3週と8月第2週に誘殺数のピークが認められた。8月第4週以降の誘殺数は少なく、ピークは判然としなかった (図-1)。

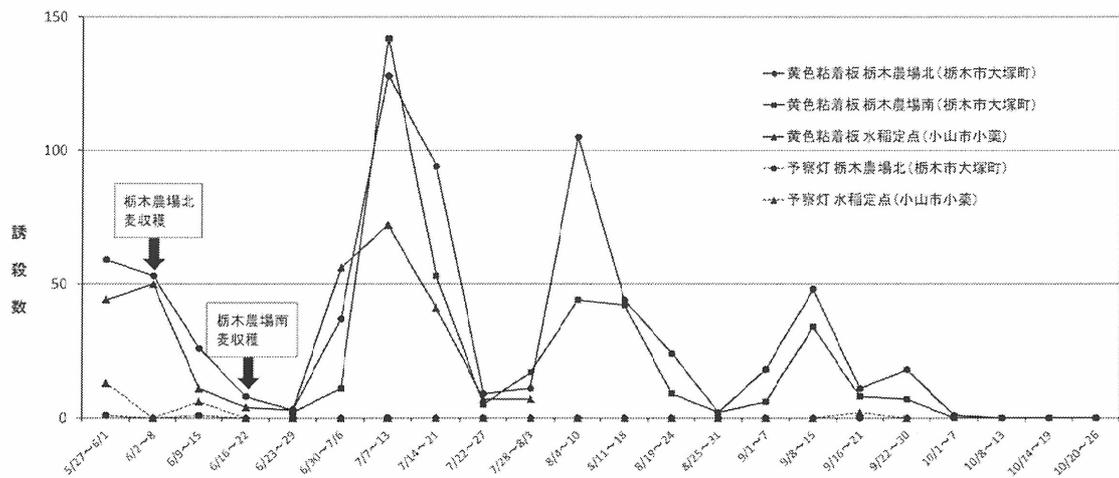
②県南部の調査地点では、予察灯での誘殺は5月下旬から6月上中旬にわずかに誘殺が認められたが、6月下旬以降ほとんど誘殺が認められなかった。一方、粘着板への誘殺は、設置直後の5月下旬から認められ、その後も7月第2週、8月第1週及び9月第2週に誘殺数のピークが認められた (図-2)。

以上より、県中部で6月上旬、県南部で5月下旬から誘殺が認められたことにより、二条大麦からの飛来があることが示唆された。また、県南部では第一世代成虫の飛来のみならず、次世代以降の成虫誘殺の3回のピークが認められ、かつ、各地点同様の消長を示し、水稲栽培期間内の発消長調査も可能であると考えられた。



図一 宇都宮市瓦谷町における黄色粘着板によるヒメビウカ誘殺数の推移

注: 誘殺数は黄色粘着板5枚の合計値。



図二 栃木市大塚町及び小山市小栗における黄色粘着板によるヒメビウカ誘殺数の推移

注: 誘殺数は黄色粘着板5枚の合計値。